

## 平成 24 年度 第 3 回長野県観光振興審議会 議事録

1 日 時：平成 24 年 8 月 21 日（火）午後 1 時 30 分から 16 時 15 分

2 場 所：長野県庁議会棟 3 階 第一特別会議室

### 3 出席者

[委 員] 井上弘司、今井明美、岡庭一雄、久保田くに子、駒谷嘉宏、佐藤博康、  
塩島和子、高野和也、玉沖仁美、中川完治、松本 猛（敬称略）

[長野県] 観光部長 野池明登、観光企画課長 浅井秋彦、  
信州ブランド推進室長 熊谷 晃、観光振興課長 秋山優一、  
国際観光推進室長 佐藤公俊、移住・交流課長 小田切昇、  
国際課長 白鳥博昭

### 4 議事録

#### （浅井観光企画課長）

ただ今から第 3 回長野県観光振興審議会を開会させていただきます。

本日は審議会会長であります佐藤委員をはじめ、11 名の委員の皆様にご出席をいただきありがとうございます。近藤清一郎委員、高野登委員、渡邊充子委員は所用のため欠席するというご連絡をいただいておりますので、ご報告をいたします。

本日はおおむね 4 時頃を終了の目途とさせていただきます。長時間にわたる会議になりますけれども、よろしくお願ひします。

それでは最初に、野池長野県観光部長からご挨拶を申し上げます。

#### （野池観光部長）

観光部長の野池でございます。一言冒頭のご挨拶をさせていただきます。

皆様には大変お忙しい中、またお暑い中、観光振興審議会にご出席をいただきまして本当にありがとうございます。

先月になりますが、県下 10 地域におきまして地域懇談会を集中的に開催させていただきました。佐藤会長をはじめ委員の皆様には、地域の生の声をお聞き取りいただくため、ご参加いただきました。各地域の皆さんからも、委員の皆様にご直接自分たちの声を届けることができ、大変有意義な場であったという感想をいただいております。

また、今月上旬になりますが、長野県観光にとって重要な東京、名古屋、大阪の 3 大都市圏でも懇談会を開催させていただきました。長野県ゆかりの人が多かったわけですが、県内にはなかなか気付かない視点、長野県に対して非常に熱い想いをお持ちの皆さんのご意見というのは、違った意味で大変貴重なものでございました。後ほど地域懇談会と合わせてご報告させていただきたいと思ひます。

加えて、9 月末までの期限で、県民の皆様からの意見募集をしております。これ

らの意見を計画づくりに活かしていきたいと考えております。

今回は諮問以降3回目の審議会ということであり、佐藤会長の下で一定の「中間とりまとめ」をしていただくということでございます。これは、今後さらに議論を深めていただくために、中間地点で議論の過程をまとめて公にしていくということでございます。長野県観光がめざす姿、重点的に取り組む施策などについて、是非忌憚のないご意見をいただければと思います。

それから、現在ご議論いただいている新しい観光計画は来年度からスタートするわけですが、それに先立って今年度既にスタートしている新しい観光施策がいくつかあります。具体的には、観光振興に面的に取り組む「観光地域づくり」、「移住・交流の推進」、それから「信州ブランド戦略の策定、推進」の3つの施策となりますが、これらは来年度以降も主要な施策になると考えています。本日はその取組状況について委員の皆様にご紹介させていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

#### (浅井観光企画課長)

次に、新任委員のご紹介をさせていただきます。

2年にわたりまして当審議会委員を務めていただきました奥原克彦委員が6月22日をもって退任されました。それを受けまして、JR東日本長野支社営業部長の竹村元尋様に後任の委員をお引受けいただき、委嘱を申し上げます。ただ、本日は所用によりご欠席ということでご連絡をいただいておりますので、合わせてご報告を申し上げます。

それでは本日の議事に移らせていただきます。当審議会の議長は会長が務めることになっておりますので、佐藤会長、よろしくお願いたします。

#### (佐藤会長)

それでは、まずは、野池観光部長からもご紹介がございましたけれども、新たな観光振興基本計画の策定に先立ちまして、既に本年度からスタートしている3つの施策について、我々も情報共有をしていきたいと思っておりますので、事務局側からご説明いただきたいと思います。内容は、「観光地域づくり」、「移住・交流施策」および「信州ブランド戦略」の3つについてであります。

それでは1つ目の「観光地域づくり」から紹介をお願いしたいと思います。説明はこの6月にこの施策の目玉としてスタートしております、「信州・観光地域づくりマネジメント塾」の塾長を務めておいでの立教大学特任教授、清水慎一先生をお願いしております。

清水先生の方から現在の状況などを含めてご説明いただければと思いますが、よろしくお願いたします。

#### (清水教授)

皆さんこんにちは、お世話になります。今日はこういう機会をいただきましてありがとうございます。

過日、長野県の観光戦略アドバイザーということで、長野県観光の戦略や施策展開についてお手伝いをする事になりました。私はもともと小諸市の出身なものですから、ふる里である長野県に対して何らかのお手伝いができるということのをうれしく思っております。ご指導よろしくお願ひ申し上げたいと思ひます。

私の方からは、「観光地域づくり」についてお話し申し上げたいと思ひます。

私はこれまでJR、JTBを含めて観光産業に長く関わってまいりましたけれども、外から今の長野県観光をみていますと、課題が相当多く、困難な状況にあると思ひます。

それはですね、あちこちで旅館が潰れていますが、まずは観光産業自体に極めて課題が多いということです。

もう1つは、地域の人の目からみて、本当に地域が観光で潤っているのかどうかということです。今、安曇野で議論してはいますが、NHKドラマの「おひさま」の観光で地域が本当に潤っているのかどうか、これも極めて問題ですね。

それからさらにいえば、お客様が本当に満足しているのかどうか。いろいろな長野県のデータをみますと、満足度指数は極めて低いですね。

そういった意味で、観光事業者、地域、お客様それぞれが課題を抱えており、あるいは満足度が低いといった意味で、長野県の観光は今、極めて困難な状況に直面しているのではないかと思ひます。このような困難な状況を打開するために、この審議会で審議が行われていると思ひますので、是非皆さん方の忌憚のないご意見出し合っただいて、この状況に対応していただきたいと思ひます。

私自身が思うに、そういった状況になった原因が何なのかといいますと、1つはやはり、長野県の観光がどうあるべきか、信州らしい観光とは何かという大きな志が見えないということだろうと思ひます。大きな志が見えない中で、プロモーションを含めて、テクニックばかりやっているということが、多分いろいろな意味でお客様、地域、観光事業者の間で齟齬を生じさせているのではないかと思ひます。

それから2つ目として、そういった大きな志を具体化する、これは、来訪者である観光客と地域とが一緒につくり上げていかなければいけないのですが、その過程でいろいろな商品やプログラム、あるいはいろいろな形の手段が出てくるのだと思ひますが、その具体化が十分にできていない。残念ながらプロモーションに偏重しすぎていると私には思ひます。

このような問題意識のもとで、私は今、知事にアドバイスをしたり、各地でいろいろなお話をさせていただいているところであります。どうか、この審議会において、そういったご議論を是非よろしくお願ひ申し上げて、テクニックやプロモーションがどうということではなく、信州らしい観光とは何かという志、あるいはそれを具体化する方策についてのご議論をよろしくお願ひしたいと思ひます。そういう中で県が果たすべき役割というものをはっきり示していく必要があると思ひます。一般的には、方向性を示したところで誰が何をするのかという議論をしっかりとしないと、それは単なる作文に終わってしまうのではないかと思ひます。そういう意味で是非、県の役割とは何かというご議論をよろしくお願ひ申し上げたいと思ひます。

このようなことを考える中で、私は最後に人づくりが重要だという結論に至りま

した。観光というのは地域と来訪者が一緒になってやる活動ですので、そういう意味で、アクターは来訪者だけではなく、地域の「人」がポイントになるわけです。この人たちがどのように来訪者と接し、来訪者とどのようなまちづくりをやっているのか、その辺りについてしっかりした議論が行われなければいけない。そういった意味で、「人」にしっかりと焦点を当てて、人づくりに取り組まなければいけないと私は考えております。

私は、たまたま観光庁で観光人材育成の座長を長く務めておりまして、前から気になっていたわけですが、この長野県においては、人づくりがもっと必要であろうと思っております。そういう意味で、知事と人材の育成、あるいは人と人とを繋げるネットワークをどのようにつくっていったらいいのかという議論をする中で、今ご紹介いただいた人材育成の塾がスタートすることとなりました。私が塾長ということでございまして、公益財団法人日本交通公社の山田さんに私のアシスタントをお願いする中で、各市町村から推薦いただいた20名余りの若い方々を、月1回、今年度は10回ですが、勉強会をやりながら鍛えていこうという趣旨でございます。

基本的には4年計画でございまして、1年でそのような人材育成はできるわけがありません。2年間徹底的に教育いたしまして、3、4年目には各地域に入ってその地域の観光地域づくりの担い手として、あるいはリーダーとして、地域の方々のしがらみに挑戦をしたり、あるいは地域の方々の議論に入り込んだり、あるいは地域の方々の合意形成を行ったりという中で、一歩ずつ前に進めていく形でございまして、基本的には4年間の計画で人材を育成します。現在は途中の過程でございまして、来月からは小諸市内でフィールド・ワークをしながら3回続けて議論をしていこうということになっています。

1期生は20名ちょっとで4年間教育いたしますが、3年目にはさらに20人近くの2期生を募集いたしまして、この2期生は、私だけではなく、1期生からも指導を受ける予定です。1期生が2年間の間にいろんな勉強したこと、あるいは悩んだことを2期生にぶつける形で、いわば人材が人材を鍛えるという好循環の中でやっていく予定でございまして。

申し上げにくいことを言いますと、今までの人材育成は、単に外部からゲストスピーカーを呼んでやる一過性の勉強会でした。いつも決まったような講師が来られて、その方の話を聞いて、それで終わっていたというのが長野県の人材育成のやり方でしたが、それでは大きな効果は期待できないので、今回は4年間という長丁場の中で、徹底的に自分を鍛えていただくということでございまして。

そういう意味で、毎回事前の課題をたくさん用意してございまして、それらをこなして塾で発表をしてもらい、さらにそれを皆で議論するという形で進めていきたいと考えておりまして、いわばそのような環境で自分を鍛えるということでございまして。先程申し上げたとおり、2年経ったら今度は自分が新たな人たちを鍛えていくという循環の中で人づくりに取り組む形で、マネジメント塾を開始してございまして。

委員の皆さんも関心をお持ちであれば傍聴いただいて結構ですし、議論にご参加いただいても結構ですので、長野県の観光振興審議会の委員として長野県観光に責

任をお持ちいただく立場でいらっしゃるのですから、是非いろいろな方々との議論にご参画いただければ、大変有難いと思っております。

そういった形で、観光地域づくりマネジメント塾が始まっています。なお、塾生は若い人たちでございまして、サラリーマン社会の中で塾に出席しづらいという状況があっては困るので、上司をはじめ皆で支援していく仕組みが必要になります。商工会議所連合会、観光協会、農協などによって構成される支援組織が、観光地域づくりを支援するために組織されました。つまり、長老の方々には若い人を温かく支援をしていただく、若い人はそういう支援の下であまり目の前の事を気にしないでしっかり勉強する、観光地域づくりマネジメント塾による人材育成を支援する支援機構も組織してございます。今度知事にも入っていただいでですね、知事と塾生と徹底的に議論をしようということを進める予定でございます。

冒頭で申し上げましたが、長野県観光の課題は、信州らしい観光とは何なのかということをもまずは徹底的に究めていただくことだと私は思います。それから、それを具体化していく、それが地域経済の好循環になるわけです。塾生には2年間でそこを徹底的に考えさせ、自分の考えをまとめてもらうことに取り組んでもらいたいと思っていますので、皆さん方のこの審議会の論議が、このような現場の論議と旨くマッチできることを大いに期待申し上げたいと思います。

以上でございます。

#### (佐藤会長)

ありがとうございました。

ただ今、清水先生からご紹介いただいたマネジメント塾、観光地域づくりの施策に関してご質問やご意見がありましたら、あるいは審議会からマネジメント塾にこういう人材を育成してもらいたいという要望であってもいいと思います。ご発言いただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

井上さん。

#### (井上委員)

はじめに、良い人材を育成していただく目的で塾を始めたのだと思いますが、実は、育成した人材の足を引っ張るのは、まずは我々年寄りであり、次に行政です。その辺りをどのようにしていくのか、せつかく育てても潰してしまう実態があります。塾で育てた人材を潰さないようにするためどうしたらいいのかということをお県として考えていただきたいと思います。

それからもうひとつは、こうした情報が我々のところにくるのが遅い。もう少し早くこうした情報をいただいて、機会があれば傍聴したかったということがありません。例えば今年諏訪で全国産業観光フォーラムがあるのですが、審議会には情報提供は一度もされていないような気がします。こうした情報の共有をもっと密にお願いしたいというのが私からの要望です。

#### (清水教授)

おっしゃるとおり、鍛えた人材が地域で活躍できるかどうかが一番のポイントです。先程申し上げたとおり4年計画にしているのは、はじめの2年間で主体的に意思をつくり上げるとのことなのです。自信を持ってこうすべきだということをつくりあげる。地域にあって、責任を持ちながら、地域の皆さんと一緒に楽しく地域づくりができる、しかもより多くの効果が得られるということであれば、観光地域づくりの人材として十分であり、今回はそれを来訪者と一緒につくり上げていくのです。そういった趣旨でございます。

そういう意味で、そのような人材を自信を持ってつくり上げていきたい。それで、3、4年目にはそれぞれが地域にお返しをすることになります。邪魔する人が出てきます。長老とか行政とかですね。今回は行政の人は人事異動があるので、基本的に人材育成の対象にしませんでした。さらにいえば、行政は地域づくりのリーダーではなく、オールラウンドプレーヤーとして地域づくり全体を温かく見守っていただく役だと思っておりますので、今回行政関係者は、2名の例外を除き、対象外としました。育成した人材には3、4年目以降は地域で活躍していただくことが必要なので、その際は、私共も地域に入って、彼らと一緒に地域づくりを進める中で、邪魔をする人を説得したり、あるいは妨害を排除したりすることが必要になってくるのだと思います。そういった形でこの人材育成は、育成しても活躍する場がないという中途半端なやり方は避けたいと思っております、そういう意味でしつこい人材育成でございます。

このため、是非皆さんからご支援をいただきたいと思っておりますし、長老の方々にもご理解いただくため、支援組織を立ち上げたわけでございます。あるいは行政の首長さんにもご理解をいただくため、私は殆どの首長さんにお会いしておりますが、このような話をしながらご理解をいただいているということでございます。

情報の共有については野池観光部長お願いします。

#### (野池観光部長)

情報の共有のご要望をいただきました。

マネジメント塾の関係は6月の立ち上げ時にご案内申し上げたのですが、2回目以降はご案内申し上げていないのではないかと思います。

それから岡谷のイベントのお話がありましたが、これは10月に岡谷市で全国産業観光フォーラムが開催されるものです。これは、単なるイベントというよりは、産業観光ということで、ものづくりの現場が観光に直結するという、全国的に力が入っている流れでございます。

メーリング・リストを活用して、ホットな情報を小まめに共有することはたいへん大切なことだと思います。今の井上委員さんのご要望から気づかせていただきましたので、小まめに情報提供させていただき仕組みをつくりたいと思っております。

#### (佐藤会長)

よろしいですか。他にご意見、ご質問がございましたらお願いしたいと思います。

いかがでしょうか。

はい、松本委員お願いします。

#### (松本委員)

今清水先生がおっしゃる、志がみえないとか、プロモーションの偏重については私も同感なのですが、たぶん実働部隊になる塾生たちとこの審議会がどういう関係なのかということが、一番大きな課題だろうと思います。その中で塾の大きな志というのが一体どういうものなのかということをお聞かせいただかないと、我々はそれについて論議のしようがない。まずそこが1点です。

それから、塾生というのはどういう経緯で選考されたのか、今後その方たちが地域で活躍するためにどのような保証があるのか、その辺りを確認したいと思っております。

それから、審議会ですら今まで議論してきたことが、どういう形でこの塾に反映されるのか、その辺りのことをお伺いしたいと思います。

#### (清水教授)

まず、後半の方からお答えしますが、選考の過程は、基本的には各地域、地域というのは商工会、商工会議所、農協あるいは諸団体の長の推薦を受けて、その推薦を基にこちらの方で書類や作文などを踏まえて選ばせていただきました。

それから審議会との関係ですが、私はやはり先程申し上げた2点がこの審議会でも大きな議論になると思いますので、その辺りの議論をしっかりと横目で睨んでいきたいと思っております。今松本さんからもありましたように、特に信州らしい観光とは何か、どういう志でやっていくのか。この部分が一番大事なところだと思います。2番目のそれを具体化してどうやって経済として循環させ、持続させていくのかという部分は、そんなに難しい議論なくして共通点を見いだせるのではないかと思います。1番目の信州らしい観光とは何か、それを踏まえた各地域のその地域らしい観光とは何か、これははっきり言って相当議論が必要で、場合によっては収斂が難しいと思います。ですから、この審議会におけるこの皆さん方の議論を私は注目しているわけがございます。この審議会はテクニックやプロモーションのやり方を議論する場ではないと思いますので、その辺りは私共としては是非参考にしていきたいと思っております。

さて、信州らしい観光とは何か、それを踏まえた地域らしい観光とは何か、これは、私も小諸で生まれここまで生きてきたわけですが、この暮らしを支えてきたいろいろな要素をどのように大切にしていくかということだろうと私自身は思います。山岳、自然、景観、あるいは水や食、過去から現在にわたるこういった暮らしを将来にわたって担保していく、そういった要素を大切にしていくことが、私は信州らしい観光ではないかと思います。ですから、例えばこういった信州の自然、景観や食などを大切にしながら、それを皆でどのように楽しみ、後世に伝え、合わせてそこに来訪者を巻き込んでいくか、そんな観点で議論していくと、自然環境の保護だとか景観の維持とか、そういった議論が行われなければいけないと思っております。

す。

そういう中で、県の役割が見えてくると、県がやるべきこと、それから地域の行政がやるべきこと、さらには国がやるべきことが見えてくるわけです。そういう中で、県の諮問機関であるこの審議会でするべきことは何かということ、是非、見極めていただきたいと思います。

例えば、先週も知事に申し上げましたが、信州らしい自然や景観をどのように保全し、それを楽しみ、来訪者とともにさらに磨き、将来に遺していくかという、例えば県全体で屋外広告物をなくすとか、あるいはいろいろな景観の総合景観をもっと大切にしていくとか、あるいはさらに言えば、信州の道を歩けるように歩道を整備していくとか、そういった行政でしかできない役割が見えてくるのではないかと、こういったものを観光審議会の議論の中で埋め込んでいただければ大変いいのではないかと私は思っております。

**(佐藤会長)**

はい、他にございませんか。はい、お願いします。

**(久保田委員)**

マネジメント塾に期待したいと思いながらお話をうかがいました。

実は先日、下伊那地域の地域懇談会が開催されまして、会場にいらっしゃった県の皆様には感じていただけたのではないかと思いますのですが、飯田・下伊那地域には県の施策に対して南北格差を感じている人達が非常に多いわけです。マネジメント塾の受講生についての地域バランスは、どのように取っているのでしょうか。

**(秋山観光振興課長)**

観光振興課長の秋山でございます。

県内には10広域があるわけですが、今塾生が23名おりまして、全ての地域から1名以上出ております。例えば、松本が4名、長野が5名と少し多い地域はありますが、県内全域から塾生を出していただいております。

**(清水教授)**

私からこのような発言をするのはどうかと思いますが、南北格差というものが具体的に何なのか、いわゆるハードやインフラなのか、あるいは気持ちなのかということ、これを突き詰めた方がいいと思います。

観光という側面では、ある意味、格差を感じる必要は全くないのだろうと私は思います。飯田には飯田のよさ、伊那には伊那のよさ、小諸には小諸のよさがあり、これらをどういう形で引き出していくのか、これが観光という側面の一番いいところだと思っています。

ただ、問題は、先ほどありましたように、それらのよさを皆で楽しみ、あるいは来訪者と共に味わい、さらに磨き上げる過程で移動の手段や道路が必要になるので、そういった意味でインフラや移動の手段といったいろいろな格差が出てくるのだら

うと思いますが、最初からハードの議論になるのは本末転倒ではないかと私は思っています。

(佐藤会長)

いかがでしょうか。はい、お願いします。

(岡庭委員)

行政の立場からこの審議会に参画しています。

ただ今の清水先生のお話はそのとおりだと思いますが、今日示されている県の新しい計画の「中間とりまとめ(案)」をみても、清水先生がおっしゃるように長野県観光が危機的な局面を迎えているという状況把握が具体的にできているのかということが一番心配に思います。例えば、20人の塾生が頑張っただあとに各市町村に戻り「じゃあ一緒にやりましょう」といったときに、この危機的状況を地域が共有していれば一緒にやろうということになります。つまり、意識を共有できているかどうかということが一番問題だと思っています。先生がおっしゃるとおり、観光産業は壊滅的な状況にあります。そのことを、我々も県も、あるいはいろいろな産業の人も、どのようにとらえているかが重要なのだと思います。

かつて、私はある老舗の温泉地に行きましたが、そこでは簡易郵便局がやっていた温泉施設の経営がある大きな温泉資本に変わっていましたが、それまではその温泉地に来るお客の6割がその温泉施設のお客で、残り4割のお客を残りの旅館の人たちが配分し合っている状況でした。その結果、その温泉地では道に草が生え、行政もどうやって手を付けたらいいかわからないという状況にあった。そういう状況にあるのが観光産業なのです。このような危機的状況を我々がどのように共有化できているのかということが重要だと思います。

それから2つ目ですが、我々行政は、観光産業で得た果実が住民の人たちの幸せに回ってこない、観光産業の振興に予算を付けるということになってこないんです。そういう点からいうと、観光産業そのものが傷んでいるものですから、今はそのところだけで必死になっていて、地域でお金を回す仕組みが出来てないんです。我々行政が観光にかなりの予算を入れるとなると住民側から抵抗が出て来る状況があり、それを循環型の仕組みを作っていくためだということで説得をしているのですが、そういう点で非常に厳しい状況にあると思っています。

そうすると、先ほど先生がおっしゃったように、まさにプロモーションのようなお客さんにいかに来てもらうかというその場の問題ばかりに目を取られて価格を下げる、合わせて質も下げるといことになるので、当然、お客さんの満足度がどんどん下がっているわけです。

このような厳しい状況を長野県観光に携わる人たちがどういう形で共有化しているのか、先ほど先生がおっしゃったように、長野県観光の方向が示されていないからこういう状況がつくり出されているのかどうかということについて、皆が本当に腑に落ちた形で感じているのかどうかということ、私は行政の立場として、そのことが共有化できていけば、塾で学んだ人たちと皆が力を合わせてやっていこうじ

やないかということに当然なっていくのだろうと思っています。

私は今率直にそのように感じています。お答えいただくかどうかということ抜きにして、そんな感想をもっています。

#### (清水教授)

是非答えさせていただきたいのですが、まったくおっしゃるとおりだと思います。この困難な状況を皆で認識していくことが極めて大事なことだと思います。

課題を共有することが議論を収斂する前提になるとは思いますが、この辺りははっきり言って十分でないと思います。

先ほどある地域の方達と議論をしてきたのですが、その地域でも観光事業者の危機感と地域の危機感、それらを踏まえたお客様の不満足、この辺りは上手くリンクしていません。課題をお互いに共有するためには、各地域において業種あるいは団体の枠を越えて横断的に、どれだけフリーな議論ができるのかということが重要なのだと私は思います。

そういった意味で、松本委員はご存じですが、現在安曇野市で多種多様な方々が集まりいろいろな議論をしていただいています。私はこの議論に参加させていただいて非常によかったと思っています。NHKドラマ「おひさま」のロケ地になり多くの観光客が訪れましたが、一方の人たちが儲かったと言うと一方の人たちは渋滞の問題が発生して大量のごみが残ったと主張し、一方の人たちがもっと観光客を誘致すべきと主張すると一方の人たちは環境保全が重要と主張する、こういったざっくばらんな議論が今安曇野では行われているのですが、私はこういったことが必要だと思います。

その中でどういう形でその危機感を解消できるか、危機を乗り越えるための最大公約数の解をどのように求めていくかということが観光の一番難しいところだと思いますので、私共の塾生にはその渦中に入れということをしっかり言っております。渦中に入らずして観光はできないということを志の一つとして言っております。そういった塾生が渦中に入ってさらなる議論のきっかけをつくる役割を果たせば、塾の趣旨を全う出来るのではないかと私は思います。

#### (佐藤会長)

はい、中川委員。

#### (中川委員)

中川です。機会があれば、清水先生とゆっくり話し合える時間があればいいと思います。

先生がいろいろとおっしゃっていることは確かにやる必要があることですが、私にはそれは戦術にみえます。最終的には観光ということではなく、せつかく高邁な思想で塾をつくったのなら、究極の目的というのは、観光であれ何であれ、民度の向上にいくべきであって、時間がないので先生も少し省いておっしゃられているので、ややハード発想に行き過ぎているような気がします。

せっかく長野県でもブランドを推進する組織をつくったのだから、ある種の精神の基本の、何と言いますかね、体力アップと言いますか、根本的な位置というのを信州ブランド推進室という位置に置いて、その中でそれぞれの間人が地域でどう動くかという、それはまさにカルチャースタンドですから、民度の向上というものなくして、観光に限らず全てですけれども、もう一度申し上げますけど折角高邁な思想を振り撒かれるのであるならば、そこまで突詰めた体制でやっていただきたい。そう思います。

**(清水教授)**

批判する前に、是非、塾を傍聴していただきたいと思います。傍聴された上での批判であれば甘受致します。

**(中川委員)**

私は批判で申し上げているのではなく、観光であれ何であれ、最終的に人の気持ちの中に入るものだと思いますから、その気持ちの部分を理論武装して支える一番のものがブランド推進室の位置ではないかと申し上げているだけです。

**(清水教授)**

私どももしっかりと議論しているつもりですから、是非、傍聴していただきたいと思います。

合わせて、この審議会の議論がそういったものになることを大いに期待したいと思います。

**(佐藤会長)**

よろしいですか、本日の本題に入る前に時間を取っておりますので、ご議論はこの程度にしていただきたいと思います。

ただ、先ほど松本委員からもございましたが、この審議会と塾の立ち位置の違いをどのように仕切りを付けていくのかということ、私もお話をうかがっていて非常に難しいと思いました。清水先生のおっしゃる内容では、例えばここで審議されたこと、決められたことに注目する、注目してある程度尊重はするけれど、自分の意向に合わなかったら認めないというニュアンスがどこかに感じられるので、その辺りは県の方で我々は一体どういう立場なのかということをきちんと整理していただかないといけないと思います。お忙しいところを毎回集まっていただく委員の皆さまの労力も大変なことだと思いますので、お互いに向き合うのではなく、是非同じ方向に向かう形で、効果的な組織の使い方をやっていただきたいとまとめさせていただきます。

清水先生には今後ともこの審議会の動きに注目していただきたいと思います。実は清水先生の塾に僕の教え子が一人入っております、いろいろ教えていただき面白いことをやっているという様子を僕もお聞きしています。ひとつ頑張っていたいただきたいと思っていますので、よろしく願いいたします。

それでは、2つ目の施策「移住・交流の施策」、3つ目の施策「信州ブランド戦略」に移りたいと思います。実はこの審議会での審議に先立って、ある程度進められている施策がございます。ただ今の塾の取組もそうなのですが、審議と並行してこういった施策が進められた場合どこでどう擦り合わせていくのかということが気になりますので、その辺りもご説明いただこうと思いますので、よろしく申し上げます。

#### (小田切移住・交流課長)

移住・交流課長の小田切と申します。

お手元に用意させていただきました資料1-2「長野県の移住・交流推進の取組み」をご覧くださいと思います。私どもの課で担当いたしております、移住・交流の関係について概要をご説明させていただきたいと思います。

2ページでございますけれども、移住・交流課は、本年4月、信州ブランド推進室とともに観光部に新しく設置された課でございます。所掌事務は、移住・交流、いわゆる田舎暮らしの推進並びに青少年交流、訪日教育旅行、スポーツ交流など各種交流事業を担当させていただいております。以下、資料に基づきまして、業務の概要についてご説明させていただきたいと思います。

3ページでございますけれども、私どもの課の大きな業務の一つでございます移住・交流、具体的には移住関係、特に田舎暮らしの推進の関係でございます。ご存じの通り、昨今の人口が減少する社会情勢の中で、一方では団塊世代をはじめとする多くの世代で、豊かな自然の中で生活を送りたいというニーズが高まっているという状況がございます。長野県は、田舎暮らしに関しては各種アンケート調査でもたいへん高い評価をいただいているという状況がございます。こうした中で長野県の強みを活かして移住・交流を積極的に進めるため、本年3月16日に「長野県移住・交流推進戦略」を策定させていただきました。詳細は下段の4ページでございますけれども、9つの戦略ということで、きめ細やかな情報提供、さらには田舎暮らしのニーズが高い3大都市圏の拠点整備等の戦略を策定いたしまして、現在この戦略に基づき施策を進めさせていただいているところでございます。

5ページ目でございますけれども、この戦略に基づく取組の1つとして、この5月に、首都圏にお住まいの方の田舎暮らしの相談にワンストップで対応するため、有楽町の東京観光情報センター内に「長野県移住・交流センター」を設置させていただいたところでございます。2名の相談員により対応させていただき、2か月余りで各種問い合わせも700件を超え、順調なスタートを切っている状況でございます。

その下の6ページ、交流関係でございますけれども、昨今、旅行のスタイルやニーズが多様化する中で、従来の物見遊山型の旅行から、テーマ性のある、あるいは体験型の旅行が注目を浴びているところでございます。具体的にはグリーン・ツーリズムやスポーツツーリズム等でございますけれども、この中で私どもの課といたしましては、おめくりいただいた7ページ目、一つは長野県の農山村を活かした農山村体験、いわゆるグリーン・ツーリズムの交流事業を積極的に進めておるところ

でございます。昨年10月には更なる国内外からの青少年を農村を舞台とした農村体験を通じた交流を積極的に進めようということで、「国際青少年交流農村宣言」を取りまとめ、発表させていただいたところでございます。またこの4月には、この宣言を具体的に進めて行こうということで、8ページにあるように、アクションプランを策定いたしまして、ご覧のとおり、訪日教育旅行、農村の癒しを活かしたニューツーリズムなど進めていこうということで、ご賛同いただきます市町村並びに農政部など関係部局と連携を取りながら、青少年交流農村づくりに取り組んでいるところでございます。

9、10ページでございますけれども、スポーツ合宿の関係を私どもの課で担当させていただいています。具体的にはスポーツ合宿の誘致を推進しているわけですが、ご存じのとおり菅平高原はラグビー合宿の適地として非常に環境に恵まれているところでございます。こういった強みを活かしたスポーツ合宿誘致を進めて行こうということで、この4月に東京の観光情報センター内にスポーツ合宿とMICEの誘致を専門に担当する推進員を配置して誘致に取り組んでいるところでございます。

11ページはフィルムコミッションの関係でございます。NHKの連続テレビ小説「おひさま」に代表されるように、去年は長野県を舞台としたテレビ番組や映画の放映がございまして、県内はロケ地を巡る多くの観光客でにぎわったところでございます。こうした中で、この3月には、県内のフィルムコミッションや市町村など42団体により構成される「信州フィルムコミッションネットワーク」を設置させていただいたところでございます。各地のフィルムコミッションなどと連携をとりながら、ロケ支援に向けたワンストップサービスなどに取り組んでいるところでございます。

最後の12ページになりますが、「楽園信州ファンクラブ」事業でございます。これは本年6月の補正予算においてお認めいただいたものであり、現在県観光協会と連携を取りながら事業の構築に取り組んでいるところでございます。具体的には会員に対して魅力ある特典を提供することにより、長野県を愛していただけの方々にファンクラブに加入いただき、繰り返し長野県を訪れていただこうというものです。また、幅広い情報発信を通じて、長野県への来訪さらには交流人口の拡大を図って参りたいと思っております次第でございます。

以上、簡単でございます、移住・交流課において進めている業務の概要について、ご説明をさせていただきました。

**(佐藤会長)**

はい、ありがとうございます。質疑応答についてはこの後時間を取らせていただきたいと思います。

続いて、「信州ブランド戦略の考え方」についてご説明いただきたいと思います。熊谷室長、お願い致します。

**(熊谷信州ブランド推進室長)**

信州ブランド推進室長の熊谷でございます。このような機会をお与えいただき、

ありがとうございます。

ブランド戦略につきましては、前回第2回目の審議会で行われたワールド・カフェにおいて大変貴重なご意見をたくさんいただきました。具体的には、観光施策を進める中で骨太のブランド戦略が必要なのではないか、ブランド戦略を策定するに当たっては地域のポテンシャルに光を当てるべきではないか、また、観光客の期待を裏切らない品質を維持したり向上させるためには、まずインナーブランディングが必要であり、次にそれをマネジメントしていくことが重要であるといったご意見でございまして、それではどのようにブランド戦略をつくっていくのかということ、今非常に格闘している最中でございまして、まだイメージでしかございませんがご説明させていただきます。

資料1-3「信州ブランド戦略の考え方について」の1ページ目はブランド戦略のイメージでございまして、左側の現状に書いてございまして、現在信州にはいろいろな個々のブランドがあり、矢印が示すようにそれぞれが発信をしているようなイメージでございまして、皆様からご意見をいただき私どもで考えましたのが、ベースに信州のアイデンティティともいべきブランドコンセプトをしっかりと定めることによって個々のブランドそれぞれが輝き、幅を持たせる。それを側面から戦術であるブランド行動計画が力づけることによって、信州全体の発信力が強まると、というようなイメージを考えている次第でございまして。

下の絵は個別ブランドと戦略の関係のイメージ図となっておりますが、今いろいろとご意見をいただいているところです。信州にはいろんなブランドがありそれぞれが活躍しているのでそれを総合的にまとめた信州ブランドというものがあるのか、それから、各地域が個性を主張する中でそれとの整合性を取れるのかというようなご指摘をいただいておりますが、その関係を示したのが2の図になります。各地域では今までの血の滲むような努力で確かに個別の商品やサービスというブランドが作られてきたわけでございまして、この中には直接的に信州ブランドを発信しているものもございまして、その下に小さなお皿でくくってございまして、安曇野や小布施といった地域ブランドを発信しているものもございまして、また、それらの地域ブランドが信州ブランドを支えて発信しているというような部分もございまして、結局私たちが見出しそうとするブランドコンセプトとは何かと考えたときには、やはりこの商品・サービス全体の底流に流れるコンセプト、信州のアイデンティティを個性として強調あるいは主張をしていきたいと考えているわけでございまして。

左側にあるようにそれを側面から支えるのが戦術でございまして、いわゆる行動計画、発信力の強化だとかクオリティーの向上、品質管理、PDCAによるチェック、品質の向上ということも合わせて行っていきたい。こんなことを考えております。

2ページ目にまいりまして、じゃあ、信州ブランド、信州のアイデンティティとは何だろうと考えておりますが、信州ブランド戦略の構造として、左側にブランドコンセプト、右側に行動計画ということで、中川委員からいただいたご指摘を反映

しまして、戦略として連想機能を広く構えるのが左側のブランドコンセプトであり、右側が戦術として具体的にその強みを語っていく、また向上させていくという意味での行動計画という形をとってございます。特に左側のブランドメッセージについては、ブランドコンセプトとは果たしてどんなものだろうかという今悪戦苦闘しているところがございますけれども、やはり先日ワールド・カフェにおいてもご指摘をいただきましたが、今、「生きるということの本質」とはどのようなものなのかということ現代のマーケットは非常に渴望しているというご指摘をいただきまして、そのようなところを信州の暮らしを支えてきた要素、先ほど清水先生のお話にございましたように、信州人の志というものをここで示していくのかなど。信州の暮らしを今まで支えてきた要素を、ここで明確にして主張していくということが必要ではないかと思っています。とかく控えめな信州人でございますけれども、主義主張を明確にしていこうということで、こういったところで先ほど中川委員からご指摘があった民度というものにも寄与するのではないかと感じております。

右側の行動計画の方はあくまで例示でございますが、それぞれ柱を明確にしたうえで、民間、行政の各団体の役割分担と連携のあり方を示しながら、それぞれの具体的な達成目標も入れながらやっていきたいと思っています。その下の方に第1期行動計画の策定期間と書いてございますが、今年度中に概ねのものを作りまして、25年度から29年度までの5か年ということで、県の新たな総合5か年計画と連動させたいと思います。また、毎年度末には成果を検証しながら、概ね3年経過時位には計画の見直しを実施したいと思っています。

左の下の方には凝縮されたメッセージ「ワンボイス」とございますが、とかく今までの行政は、このキャッチフレーズで終わってしまったわけでございますが、皆さんにお伝えしたいと思っていますのは、左側にあるように志を明確にし、右側にあるように具体的な戦術により磨き高めていく行動を県民とともに進めて行く、そのような形を今回は重視してまいりたいと思っています。

3ページ目では、行動計画全体を全て同時に行っていくわけにはいきませんので、ステップ1、ステップ2というような段階を経て、まずインナーの質を高めたうえで、アウトターに展開してまいりたいと考えています。その下に推進体制がございしますが、今、6月に立ち上げた県と市町村のワーキンググループで一生懸命考えております。それから、7月25日には経済界、大学、行政、マスコミなどが入りました信州ブランド研究会を発足し、県内26団体の代表にご参加いただきまして、検討を開始したわけでございますが、松本大学からは佐藤先生にご参加いただいております。このような仕組みの中で信州のアイデンティティを明確にして、具体的な行動計画を検討し、そして年度末にはブランド戦略を策定したうえで、来年度にはキックオフして、行政側はブランド戦略推進県本部、主役となる民間側の産・学・官のブランド研究会はブランド戦略推進県民会議へと、これが中心となって、行政側が支える形で継続的にブランドを磨き向上させる、こういったこと進めて参りたいと考えております。

今時点ではイメージだけの話ですが、次回あたりには具体的なコンセプトや骨子といったものを段々お示しすることができるかと思っていますので、ご指導いただ

きたいと思います。  
よろしく申し上げます。

**(佐藤会長)**

はい、ありがとうございました。

それでは、時間を取らせていただいて、先程の移住・交流推進の取組と信州ブランド戦略、この2つについて、委員の皆さんからご質問やご意見などございましたらうかがってまいりたいと思います。いかがでしょうか。

はい、井上委員。

**(井上委員)**

これは先ほど清水先生や中川委員がおっしゃったことにも通じることなのですが、私はこういった移住・交流やブランドの取組の延長線上に観光があると思っています。要するに、こういった個々のものが仕上がった形が結果として観光になるのだということです。この辺り、委員にも事細かに今何をしているのだというリアルタイムの情報が欲しいと思っています。そういう中で、いわゆるまちづくりの上がりの姿として観光があるという形になっていけばいいと思います。

もう1点、こういったものをやりながら、信州らしさと言いましたけど、信州としての新しい未来に向けてのデザインですね。信州をどうデザインしていくかというのを観光審議会の中で考えていければいいのかなと思っています。

**(佐藤会長)**

はい、ありがとうございます。

他にご意見・質問等ございませんか。特にないようですので、以上で3つの施策についての説明会を終えさせていただきます。事務局の皆さまには大変お忙しいかも知れませんが、出来るだけ、きめの細かい情報提供を委員の方々をお願いしたいと思います。

それでは、本日の本題に入らせていただきたいと思います。

ここからは新たな観光振興基本計画の中間とりまとめ（案）をご覧いただきたいと思います。事務局の方で資料の説明をお願いします。

**(浅井観光企画課長)**

観光企画課長の浅井です。よろしくお願いいたします。

資料の2-1をお願いします。現時点での計画策定の進捗状況でございます。前回6月の審議会の後、委員の皆さまにもご協力いただきましたが、県民から意見をお聞きする地域懇談会を10地域で開催いたしました。ご協力ありがとうございました。この内容につきましては、参考資料1にまとめてございますので、後ほどご覧をいただきたいと思います。

さらに3大都市圏での懇談会ということで、東京、名古屋、大阪において、県外、

都会からみた長野県、他県と比べた長野県というような視点で、県外の皆さんからこれからの長野県観光へのご意見を頂戴したところでございます。これについては参考資料2でまとめさせていただいておりますので、後ほどご覧いただきたいと思います。

さらにその下の経済団体等との意見交換ということで、県旅館ホテル組合会の皆さんとの意見交換等をやってまいりましたし、これからも経済団体と意見交換をしていきたいと考えております。

一番下に県民意見の募集ということで、これについても現在募集しております、参考資料3の方で現時点でのご意見をまとめさせていただいておりますので、ご覧をいただきたいと思います。

これらのご意見をまとめまして、今回第3回の審議会ということで、中間とりまとめ（案）をまとめさせていただいたところでございます。

今後は10月、11月とあと2回審議会を開催をいたしまして、最終的には11月に知事への答申にもっていきたいと考えているところでございます。

それでは、資料の2-2をお願いいたします。

中間とりまとめ（案）の構成イメージというA3の資料でございます。構成につきましては、前回の審議会で議論のためのたたき台ということでお示しした資料と、それほど変わっておりません。

第1篇の第1章から第4章につきましては、当審議会でのご意見それから地域懇談会等でのご意見を踏まえまして、相当に加筆・整理をさせていただきました。その中で第4章、長野県観光の強みの中の（2）、信州暮らしが育んだ観光資源については、ご意見を踏まえまして新たに追加をしたところでございます。日常生活そのものが観光資源になっているのではないかと、そういったありのままの生活を楽しむニーズというものもあるというご意見を踏まえて、こういった事を追加させていただいたところでございます。

第2編、長野県観光がめざす姿、ここが前回まで空欄でございました。今回、長野県がどんな観光県をめざすのかという方向性について記載をさせていただきました。詳細については後ほど中間とりまとめ本文の方で説明をいたしますが、本日はこの方向性がこういった形で良いのかとか、さらには、こういったまとめかたでよろしいのかということについてご意見を頂戴できればと考えております。

それから第3篇、第4篇、これは今後第2編のめざす姿を実現するために、具体的にどんな施策を打っていくのかということに記載する場所でございます。第3篇は重点的に取組む施策という事で、計画期間中に重点的に取組むプロジェクトの例示をさせていただきました。それから第4編の方では、施策展開という事で、これは計画期間中に着実に取組む施策を網羅的に書いたというものでございまして、これも、今回例示という形でお示しをさせていただきましたので、こういったまとめ方、内容でよろしいのかということでご意見をいただければと考えておるところでございます。

第5編、第6編につきましては、次回以降事務局案等をご提示しながらご検討を

いただきたいというところがございます。

それでは、資料2-3、中間とりまとめ（案）の本文をお願いいたします。

これまでの審議会における議論や県民の皆さんからの意見を踏まえまして、当審議会として、新しい計画の基本的な考え方を中間でとりまとめたというものでございます。

2ページ以降が本文になっております。先程説明しました資料2-2、A3の構成イメージを、文章化し、あるいは統計があるものについてグラフ等でデータを表示しております。第1編の第1章から第4章までについては、引き続きご議論いただき修正もするわけですが、ボリューム的にはこの程度のものを想定しております。内容については、以前から何回も触れさせていただいておりますので、省略させていただきます。

15ページをお願いいたします。第2編、長野県観光がめざす姿でございます。長野県を訪れる観光旅行者数は長期にわたり減少し右肩下がりということで、減少に歯止めがかかっていない状況にあります。更に旅行の形態が大きく変わってきているということで、従来のやり方ではもう減少傾向に歯止めがかからないのではないかという認識のもと、今後の方向性として記載をさせていただきました。中・長期の観点から今後の方向性をまとめさせていただいたものでございます。

長野県観光がめざす姿という事で、3つに分かれております。一番上は、県民一人ひとりが「豊かな「信州暮らし」を楽しみ、発信」するという事で、個人ベースで取り組むべきことをまとめさせていただきました。人口減少をはじめ、観光を取り巻く環境が変化する中で、豊かな自然環境や優れた景観、伝統や文化等、長野県の強みに裏打ちされた豊かな信州暮らしを、県民一人ひとりが誇りを持って楽しむとともに新たな価値を創出し、県民運動としておもてなしの心で発信をしていくという姿でございます。県民参加で観光についての意識を改革していく必要があるのではないかと、そういうことも含めて個人としてのめざすべき姿を記載したものでございます。

2つ目は、「地域全体で魅力を高める「観光地域づくり」」ということで、地域としてめざす姿をまとめさせていただきました。観光地域づくりでございますので、「点」ではなく「面」としての魅力アップと発信、それから「面」としての受入体制の整備、こういったことをやっていく必要があるということで記載させていただいております。優れた地域資源を最大限に活用し、かつ広域連携により地域全体で観光地域づくりを進め、滞在時間を増加させることにより、地域経済の活性化に寄与する。それから、上の「○」は地域的な広がりという観点ですが、下の「○」ではそれだけではなく、農林水産業、商工業など、幅広い事業者が連携し、新たな観光ニーズに対応することによって、従来の観光客だけでない、交流人口を拡大していく必要があるのではないかとということでまとめさせていただいております。

それから3点目は「信州ブランド」を高め、国内外から選ばれる長野県へ」ということで、県全体として必要な取組をまとめさせていただきました。県全体の価値を高めるため、豊かな「信州暮らし」を世界に統一感を持って発信するとともに観

光旅行者の期待に応え続ける事によって長野県観光のブランド力を高め、選ばれ続ける観光県になることで、さらなる観光振興に繋げていくということでございます。

今回は中間とりまとめの案ということで皆さんからまたご意見をいただくわけですが、上がりの姿としてこういった方向性をA4で1～2枚にまとめていきたいと考えておるところでございます。

それから2の、目標達成でございます。計画の進捗状況を点検するため、達成目標の設定が必要となりますが、どのような指標を達成目標に設定するかは、今後の検討が必要ということでございます。現在の計画においては、県内の観光サービスに対する満足度、観光消費額、観光地利用者数、外国人宿泊者数の4つを基本的な指標として掲げてございます。長野県観光が全体として右肩下がりの状況の中で、どのような指標を目標として設定すべきか、皆さまからご意見をいただければと思っております。

続いて、16ページをお願いいたします。重点的に取り組む施策でございます。観光を取り巻く環境が大きく変化する中であって、長野県観光のめざす姿の実現に向け、新たな観光ニーズに対応しながら、重点的・横断的に取り組む方策を明らかにするプロジェクトを設定して取り組んでいくということで、現在、観光地域づくり以下6項目を掲げてございます。その下の7項目は「◎」のみ表示してございますが、現在この部分は例示であり、もっと他に盛り込むべき項目はあるのではないかと、または括り方としてももう少し違う方法があるのではないかとというようなことで、ご意見をいただければと思っております。また、次回の答申素案の中では、この辺りの記載、趣旨や主な取組例というようにもっと具体的に内容がわかるような形でお示ししていきたいと考えておるところでございます。

続いて17ページの施策展開でございます。観光振興を図る施策をわかりやすく体系化し、5年間の計画期間に着実に取り組んでいくものということで、ここには県が行う施策を網羅的に入れていきたいと考えております。今は施策例ということで、観光地域づくり以下5つの柱にまとめてございますが、こういった括り方、内容でよろしいか、ご議論いただければと思います。こちらについても次回の答申素案の中では、取組例を具体的に記載していく予定としているところでございます。

最後に18ページでございます。第5編の地域別の観光ビジョン、それから第6編の計画の推進のためにということですが、特に第6編につきましては、次回の答申素案の中で事務局案をお示ししながらご議論をいただきたいと考えているところでございます。

中間とりまとめ（案）については、以上でございます。

その他の資料について、参考資料の1から3までは、先ほど簡単ですが触れさせていただきました。

最後に資料4-1、4-2、新たな総合5か年計画でございます。県の総合計画についても観光の計画と同じタイミングで来年度を初年度とする5年間の計画の策

定作業を進めているところでございまして、この総合5か年計画と今こちらでご議論いただいている観光の計画については、整合をとりながら進めていく必要があると考えておりまして、参考として資料を提供させていただくものでございます。ただ、これは6月時点の大綱でございます。来週8月30日に総合計画審議会が開催されまして、この次のバージョンとして答申素案が審議される予定になっております。そこで議論された答申素案を委員の皆さんにはお送りさせていただきたいと思っております。

配付した資料については以上ですが、最後にただ今お配りした、「全国産業観光フォーラム イン岡谷」でございます。先程井上委員さんから情報提供をもっとしっかりやって欲しいというご指摘をいただきありがとうございます。遅ればせながら、10月11、12日、岡谷で開催される全国産業観光フォーラムでございますので、お時間が許す委員の皆さんのご参加についてよろしくお願ひしたいと思います。

説明は以上でございます。よろしくお願ひいたします。

#### (佐藤会長)

ありがとうございました。これから本題の方に入っていきたいと思ひます。

まず、7月の地域懇談会で各地の多くの方々からご意見をいただき、その集約が今回参考資料1に整理されておりますが、この懇談会には多くの委員にご参加をいただいております。その関係で、この審議会と地元の皆さんとで考えていることが噛み合っていないとか、あるいは同じ印象を持っていることがわかったなど、有意義な意見交換ができたのではないかと思います。地域懇談会全般にわたって感想やご意見がありましたらいただきたいのですが、いかがでしょうか。

今井委員は2か所出席されたようになってはいますが、どうですか。

#### (今井委員)

私は長野地域と北信地域に行ってきました。

皆さんお感じになられたと思ひますが、この審議会で出されているような意見が各地でも出ていました。一番感じたのは、先ほどの議論のように、皆さん差し迫っているというか、本当に真剣に考えていて、明日の生活にも困っているという意見も出ていたので、私たちがこれからの長野県全体のイメージ、目標にするイメージをつくっていくことがとても大変なことなのだとことを実感してまいりました。

皆さんターゲットは女性として思ひますので、できればもっと女性の方達に参加していただひてご意見を聞かせてもらえればよかつたなと思ひました。

以上です。

#### (佐藤会長)

そうですね。ありがとうございました。

上田に参加された高野さん、どうでしたか。

**(高野(和)委員)**

上小地域の一番大きな課題は、新幹線の延伸によって東京から金沢まで3時間で  
行けるようになると、どれだけの人が上田に寄ってくれるのかということでした。  
軽井沢には寄るでしょうが、新幹線が金沢へ行くとなれば、上田駅に停車する本数  
も増えるとは限らず、逆に減るかもしれないという中で、どうやって生き残ってい  
くのか、アピールしていくのかという危機感が感じられました。

近隣の軽井沢を訪れる観光客数が年間延で770万人いるので、このお客さんにア  
ピールしていく方法もあるのですが、軽井沢ブランドに惹かれて訪れる方たちを上  
田地域までどれだけ引っ張って来ることができるのか、やはり上田地域も相当ブラ  
ンド力を持たないと難しいのではないかと、という意見がありました。

このような課題を踏まえて意見交換をする中で、長野県内の多くの観光地、それ  
を繋ぐ地域の路線バスやタクシー、シャトルバスの情報をデータベース化して活用  
することによって、2～3年で担当者が代わってしまう県や市町村でも、観光協会  
でも、あるいは県内どこの地域のことも、観光旅行者に対して目的地への交通手  
段を含めて案内することができ、それによって「おもてなし」も向上するのではな  
いかという意見が出ました。今地域に目玉となる観光地がないのであれば、各地域  
の魅力となる部分を繋ぎ合わせることによって大きな力として、軽井沢であるとか、  
金沢や東京といった観光地と対抗していかないと難しいのではないかと、という話が出  
ました。

**(佐藤会長)**

ありがとうございました。大変貴重なご意見でありました。

駒谷さん、どうですか。

**(駒谷委員)**

私は、諏訪・岡谷を中心とした諏訪地域に出向きました。各地区が抱える問題は  
だいたい同じような印象を受けました。

それから、自分は民間であります。出席されている皆さんが行政の方が多いと  
いうことで、危機感があまり感じられないという印象を受けました。

また、市町村、行政区域が違えばバラバラであるということを実に強く感じま  
した。先ほどから塾のお話など出ていて、塾生は民間の出身ということになります  
が、私は、長野県観光を地域ごとにまとめる、あるいは広域としてまとめる際には、  
行政の皆さんがリーダーシップを持って動いていただかないと、組織ができてい  
かないのではないかと、これを常日頃からつくづく感じているのですが、今回特に  
そんな思いを抱いて帰ってきた次第です。

以上であります。

**(佐藤会長)**

ありがとうございました。これもまた大変貴重なご意見です。

各地域で吸い上げていただいたご意見等については、事務局の皆さん、既に今日

の中間とりまとめ（案）の各所に埋め込まれていると考えていいわけですね。そういうことですので、中身の詳しいところは今のコメントで補てんしていただこうと思います。

それでは、本日のこの中間とりまとめ（案）については、時間が短くて誠に恐縮ですが、発表をさせていただくうえで、皆さんとのコンセンサスを図ってまいりたいと思います。

まず、第1編の現状と課題については、これまで2回にわたって情報やデータその他について皆さんと共有が出来ているのではないかと思います。ご異議がなければこのまま、環境・現状・課題のところはこの内容でいきたいと思っています。

この審議会で特に重要なのが第4章の長野県観光の強み、それからめざす姿となります。先ほど清水先生もおっしゃっていましたが、長野県観光の志の部分や、その志に基づいた重点的に取り組む施策や施策展開をメインに皆さんとご議論を集中していただきたいと思うのですが、流れとしていかがでしょうか。

それに先立って、第1編の第1章から第3章のところまで何かご異議等ありましたら、ご発表をお願いしたいと思います。

#### （岡庭委員）

先ほどの私の清水先生に対する意見と共通しているのですが、この観光審議会そのものの役割というところに、常に私はこだわっています。この審議会の役割のひとつに経済活性化施策を検討することがあるのではないかと思います。ただ今説明があったように、多くの皆さんが長野県を訪れ長野県のよさを共有し感動してもらおうとともに、長野県民が誇りを持って生きていくというイメージの観光も重要だと思うのですが、今長野県内の旅館の倒産が全国でワースト1という状況を踏まえると、観光産業が本当に厳しい状況にある。そういう中で産業としての観光の問題をもっとシビアにとらえないと、県の総合計画との関連からみても、偏っているのではないかと思います。

そういう点からいうと、先ほどもいろいろとお話がありましたが、地域懇談会では観光業者から悲鳴に似た意見が出たに違いないと思っております。中間とりまとめ全体があまりに楽天的であり、頑張れば将来何とかかなるのではないかとこのころに帰結しているということは、現状に対する認識が現実的ではないということだと思います。

私は、上海、北京での昼神温泉のプロモーションのため、前回の審議회를欠席させていただきました。現地で大手旅行会社の日本への送客担当者の何人かと行き会って長野県観光を売り込んできました。その際担当者から、長野県に中国のお客さんを送り込む意味は全くなく、ましてや昼神温泉にお客を送り込むのは非常に厳しいという話を聞いてきました。また、東日本大震災以来、中国のお客さんの関心は圧倒的にヨーロッパに向かっているということです。日本の旅行社も、確かに「ゴールデンルート」はあるけれど、中国のお客を1泊5千円や6千円という低価格で受け入れることをこのまま続けていけば成り立たなくなるのだからもう辞めたいと思っているという話です。

今中国が日本国内でお客を送り出している先は福岡らしいです。福岡県ではひとり5千円ずつキャッシュバックしているという話です。それから沖縄もビザの特例があるので増えてきている、県がさまざまな取組をやっている宮崎に対する関心も高いということです。また、北海道はドラマの舞台になったのでそのロケ地を回るお客さんがある程度いるという話もあります。中間とりまとめをみると、中国や台湾のお客さんが長野県へ来ると書いてありますが、今の長野県には本当にそういうポテンシャルがあるのでしょうか。私は、中国や台湾からお客さん呼び込めばいいという認識では多分解決しないのではないかと考えています。そういう点では、たいへん申し上げにくいのですが、もうちょっと厳しい現実や動向を受け止めて対策をとっていくということが必要なのではないかと感じておりますので、この点は委員の皆さんの中にもいろいろな意見があると思いますが、私はそう思っておりますのでよろしく申し上げます。

**(佐藤会長)**

ありがとうございました。

ただ今、岡庭委員から中間とりまとめの現状や課題の部分に、観光産業の厳しい状況が反映されていないのではないかとのご意見がありました。例えば第1編第2章の(3)観光産業の現状の3つ目の「・」のところで「宿泊施設数は全国1位となっているものの、…倒産件数は全国最多」というところ、これだけで止めているので、倒産件数が最多という厳しい状況にあるということを強調してもらおうというご意見でよろしいのでしょうか。

**(岡庭委員)**

なぜ厳しい状況にあるのかという分析をしっかりやらないと、次の対応の部分が出てこないのではないかと思います。先ほど中国、台湾のお話をしましたが、現実というのは本当にシビアで厳しいものがあるので、その認識をどのように共有するかが重要だと思います。

先ほどの清水先生のお話と同じで、ただ言葉の上だけで共有化と言っても、「一緒に一生懸命やっぺいこう」ということにはなかなか進まないのではないかと思います。

**(佐藤会長)**

ただ今2つのご意見をいただきました。一つは、観光産業ばかりでなく、長野県観光の現状分析や今の状況に至った背景をもう少し表現すべきという点、もう一つは、第1編第4章以降、長野県観光のめざす姿や施策にどのようなことを具体的に盛り込んでいくかという部分で、それに対する答えを埋め込んでいくべきという点、こういう感じでいいですね。

高野委員、お願いします。

## (高野(和)委員)

岡庭委員には毎回旅館業界の大変厳しい状況を語っていただき、本当にありがとうございます。

私の今回の計画づくりに対する悩みのひとつもそこにありまして、観光事業者、旅館業界にとって喫緊の課題というのは、当初私が申し上げたように、制度資金が使えない状況があるので保証協会の保証枠を拡大していただきたいこと、あるいは、どこの観光地にも巨大な廃屋があり、倒産した持ち主も市町村も何もできず、累々と墓石のように横たわっている問題、そういったことにもものすごく悩んでいるわけです。

例えば、廃屋処理については国にも助成金はありますが、小さな店舗などの事例しかなく、巨大なビルに対しては適用されていないので、そういったケースも救済できる仕組みを本当は県につくっていただきたいという希望があります。また、制度資金についても今申し上げたような希望があります。

では、なぜそういう厳しい状況になったのかという点について我々が感じていることをお話すると、よく経営が下手だからそうなったとか、新しい会社買い取って経営している施設は再生して立派にやっているのではないかという指摘もありますが、実はそれは破綻した会社が負担した建築費の10分の1、20分の1で施設を取得して事業を開始しているから今は楽なだけであって、やがては、元々老朽化が進んだ建物なので、設備投資の問題が出てくるわけです。もう既にそうなっているところも沢山あって、そういった場所については取得した会社も売りたいがっていて、既に再転売してしまったところもあるんです。それで結局同じことになってしまっています。

だから、やっぱり金融機関も行政も国も含めて、先ほどのお話のように、何故そうなったかということ进行分析するとともに、ここで腰を据えて、既存の経営者、今まで頑張って何とか生き長らえている経営者に対して、観光地の景観や旅館の施設などいろいろな部分で支援してもらって何とか食い止めないといけないと思います。破綻した旅館の買い取り合戦が既に始まっているので、対策が上手くいかなかったら転売ということになるので、これまでの観光地がどんどん崩れていってしまうという気がいたします。

また、もうひとつネックと感じているのが、危機感の違い、温度差です。以前の審議会でも子どもの教育に観光を入れてもらいたいと申し上げたのは、単に、将来、20年30年後にお子さんたちに観光事業者になって頑張ってもらいたいと言ったわけではありません。観光事業者と他の方たちの温度差が大きすぎるので、長野県だけはお子さんに観光の教科書を持たせることによって、親御さんや家族の方に長野県は観光に命をかけて取り組んでいるのだと感じていただいて、観光事業者と一緒に前を向いて頑張りたいという思いをこめて言ったのです。

だから、観光教育を入れることとか、景観条例や廃屋対策として行う景観整備への助成の仕組みをつくったり、制度資金のこととか、私が必要と考える施策はいろいろあるのですが、今のままだとそれらが第3編以降にようやく入るか入らないかというところで終わってしまうのではないかと思います、非常に不安に感じます。

岡庭委員の気持もそこにあると思うのです。そこが大問題なのに現状と課題の部分の文章からはそういうことが感じられないのではないかと、私はそのように感じます。

**(佐藤会長)**

ありがとうございました。

どなたかご意見ありますか、はい、中川委員。

**(中川委員)**

中川です、手短かに申し上げます。

私は松本の地域懇談会にうかがいました。各地で出席された皆さんも多分同様の意見をお持ちだと思いますが、市町村や観光協会等からメンバーが参加していましたが、そこで聞いた声を悲鳴ではないかと感じました。その悲鳴というのは、現状や顧客が減ったということが具体的な話なのですが、もはや市町村や個の単位では対応しきれないので広域でなんとか凌ぐ方法はないかという意見がすごく多かったような気がします。

ですから、松本市さんとか一部の方と話しましたが、彼らが望んでいるのは、やはり県の観光部に強いリーダーシップで大きな戦略を立ててもらい、その傘の下で自分たちは具体的な戦術を展開したい、そういう意見が強かったような気がします。

岡庭委員のご意見をお借りするわけではありませんが、今回の答申ではそれ位のところまで突っ込んでいいのではないかという気がいたします。

以上です。

**(佐藤会長)**

松本委員お願いします。

**(松本委員)**

ポイントを整理しなければいけないと思います。

今の観光事業者の危機的状況は、長野県だけのことなのか、それとも日本全国で起こっていることなのかという問題が一つあると思います。基本的には、観光業が低迷しているというのは、今の日本全体の状況だと思います。

そうすると、ここは長野県ですから、その問題に対して長野県観光として何を提示していったらいいのかというのが大きな問題だと思います。これは短期的なものではなくて、おそらく長期的な戦略を練らなければならない、それが多分先ほど清水先生のおっしゃっていた「大きな志」という部分だと思います。その志の部分を議論するのはおそらくこの審議会だと思うので、それはやらなければならない。

しかしもう一方では危機的な状況にある現状に対して当面どういう対策を取るのかという問題があって、この2つの問題は分けて考えなければいけないと思います。ですから、今の状況に対して緊急避難的にどうしたらいいのかということは、これは戦術の問題だと僕は思いますが、それは別項として立てたらいいのではないかと思います。

それに対して論議をしなければならないのは、観光全体が沈んでいく中で、じゃあ人々は一体何を求めているのかというところであり、それはおそらくは生き方の提案なのだと私は思います。「長野県はこういう生き方をめざします」という県全体の大きな方針をこの審議会の中で提示をしていかなければいけないのではないかとことです。その部分で魅力的な信州というものをつくらない限りは、これは移住戦略の問題とも絡んでくるわけですが、人はこないだろうと僕は思います。

長野県は一体どういう生活をめざすのか、例えばエコな生活であるとか、食糧の自給であるとか、低農薬の取組であるとか、そういった生き方を積み上げてく過程がある。新しい日本の進むべき道、生き方というのはここにある、短期で訪れる観光客にも「信州暮らし」を体験してもらおうではないか、そういうことを提案していく必要があるのではないかと私は思います。

ですから、現状に対する緊急避難的な対策と長期展望の対策と、これは分けて議論すべきだというのが私の意見です。

#### (佐藤会長)

はい、今松本委員から長期の方向性と緊急避難的な対策は分けた方がいいというご意見が出ました。

私の個人的な意見を話させていただければ、観光というのはそもそも、旅行者とそれを受け入れる地域、それからその間に立つ産業という3つの分野が実に巧みに描かれた領域なのだと思います。それらがそれぞれの分野で上手く機能してお互いの意思が上手く合っていれば観光というものはうまく成長していきますが、それらが背中合わせになってしまうとバラバラになって、今各地で起きているような観光産業が駄目になったり、廃屋が増えたり、旅館が潰れたり、こういうことが起こってきます。だから、どれか一つ欠けてもまずいので、これらのバランスのとれた計画をつくっていかなければいけない。

ただ、今この審議会で議論している基本計画については、全体をカバーする発想で考えていただきたいと思います。個々のケースについては、例えば地域については、着地型・受入型の地域づくりについて先ほどの清水先生のような方が中心となって人材を育てていただければいい、これは、旅行者の目線ではなく、地域づくりの目線になるわけです。一方で、産業については、産業戦略会議、あるいは産業戦略づくりのような形で、産業の目線で別に議論を進めてもらう。それから、旅行者の目線としては、交流とかインバウンドとかそういったところに光を当てていく。これらが全部統合してようやく観光というものが成立するのではないかと感じます。

従って、今議論している基本計画の中では、個々のケースに入り込むための入口をつくっておく。そこで線を引いてここから派生していこうという形にしておいて、今回の基本計画づくりはビッグピクチャー的に進めていった方が方向性としてわかりやすいのではないかと感じます。

これは僕の主観なので皆さんがそれでは駄目だというのなら引込みますが、いかがでしょうか。

#### (高野(和)委員)

今の会長のお話や先ほどの松本委員の分けて考えるべきというご意見に賛成なのですが、私としては、これらを一緒に盛り込むということはとても難しいことなのではないかと悩んでいます。

この審議会でも美しく生きるとか、自然と共に生きるとか志的な部分を議論したことがありました。例えばこのような大目標、志というものを掲げて今回提出されている中間とりまとめのように観光振興計画をまとめつつ、美しく生きる、自然と共に生きるのだから、観光振興計画とは違うのだけれど、廃屋をはじめとする汚いものが累々と横たわっていてはいけなからそれはそれで計画に連動して対策をしていく、あるいは、廃屋を出さないために今ある観光事業者、リフト会社や旅館などが潰れないようにしていく、というように関連付けてうまく整えられれば、わかりやすくなるし何かをしやすくなるのではないかと思います。

#### (佐藤会長)

ありがとうございます。

今の高野委員のご意見も含めて、方向性としてとにかく入口を盛り込んでいく。私も、後の方でお話したいと思っていましたが、中間とりまとめ第4編、施策展開の観光の基盤づくりの柱に持続可能な観光産業をどう育成し支えるかという項目を何としても入れたいと思っていました。産業が駄目になったら先ほどの3つのかねえが崩れてしまいますから。あるいはここで欠けている部分、我々は長野県の自然を利用しようとか活用しようとか言うけれど、先ほどの清水先生のお話にもありましたが、自然を守ろうとか感謝しようという気持ちがどこか抜けていると思います。そういう意味で、景観にしても何にしても利活用という前に、まず我々がここにいることに感謝しようではないかということが抜けているので、埋めたいと感じています。

いずれにしましても、今入口のところでも前へ進めない状況なのですが、その辺りの文章をもう一度再構築していただいて、観光を取り巻く環境や長野県観光の現状についてはこういうこともあろうと思いますが、現状部分はもう少しシビアな見方をしていただこうと思います。それから長野県観光の課題のところにも今議論のあった産業分野への意識について少し盛り込んでいただきたいと思います。

第1編第3章までの部分についてはこういう方向で整理させていただいて、議論を進めたいと思いますが、どうでしょうか。

岡庭委員、いかがですか。

#### (岡庭委員)

松本委員のお話はそれで分かるのですが、観光産業というものと誇りの問題というのは、地域に行くと実は一体化して重なってきます。富の再生がないと地域の持続的な発展はないわけで、市町村長がなぜ観光観光というかということ、都市から所得が移動することによって地域経済が潤う、それによってさまざまな施策が展開できる、そういうことがあるから地域の人たちが自然を大事にしたり、いろいろして

こうじゃないかということになって、そういった気持ちを引き起こすことに繋がってくのだと思っています。ですから確実に分けるというのは難しいのです。分けてしまうと、ちょっとわけがわからなくなってしまう気がします。

今会長がおっしゃったように、長野県の観光産業の持続性をどうするかということが前文のところでもうちょっと表現されればいいのではないのでしょうか、会長から施策展開でしっかり書くという話がありましたが、前段でその問題に触れていたでいて、それに関連づけて施策展開にいくように書ければいいのではないかと思います。長野県観光のめざす姿で書いてはいかがでしょうか。加えるかどうかは皆さんのご議論によりますが、めざす方向として加えることを提案させていただきたいと思います。

#### (佐藤会長)

よろしいですか。

それでは、第1編第4章の長野県観光の強みのところからもっと濃い議論になっていくと思いますので、この辺りについてご意見をいただきたいと思います。

ここは非常に細かな部分が出ていたり、あるいはザックリとした表現が入っていたり、いろいろあるわけですが、私はこの中では、強みと言うよりは、全体の総合計画には出てくるのですが、恵みということがあると思います。環境や自然の恵みをどう受け入れていくか、あるいはこれらをどうしていくかという気持ちがここにあってもいいのではないかと思います。豊かな自然は結構だけど、じゃあそれをどうするのかという段階ではやはりそれを評価する人々や生活があって、長野県はこんなに素晴らしいところであって、それが強みなんだということをどこかに表現したいと個人的には思います。

それ以外にもいろいろあると思いますので、ご意見をうかがっていきたいと思います。いかがでしょうか。この多くは皆さんのディスカッションの中から生まれてきたものです。基本的にはそれを箇条書にまとめたものです。

玉沖委員お願いします。

#### (玉沖委員)

ちょっと具体的なことを1点と、全体をつうじてという大きく2つのことを話させていただきますと思います。

まず、第1編第4章、長野県観光の強みの自然資源のところですが、ここに自然も使うと痛むので守りながら活かしていくという視点を是非加えていただきたいと思います。そして、特に自然の豊かな長野県としては、人を入れ過ぎて自然を破壊してしまい自然観光が成立しなくなったということがないように、キャリングキャパシティ、環境容量の発想を共通認識という程度でよいので触れておいた方がいいのではないかと思います。

そしてもう一つは、全体を通してのところなのですが、私は観光の研究所の客員研究員もやっておりますので、データとマーケティングの話について少し触れさせていただきますと思います。

県の役割として、データ収集と情報提供にもう少しご尽力をいただきたいと思えます。それは何か新しいことを調査しようということではなく、既存のものも含めて、読み取ったことを戦略的にアウトプットしていただきたいということです。それは、具体的な打開策であったり、それを個性に変えていくとか、読み取り方から活かし方までを伝えていって欲しいと思えます。

そしてこの後の第3編第4編にも関係してきますが、いろいろな新しい商品開発やターゲットの取込にはプロダクアウトとマーケットインという発想が付きものなのですが、どうも最近マーケットイン、消費者の感覚の把握に重きをおいた商品開発ばかりが重要視されている傾向にあるのですが、そうではなくて、プロダクアウトも立派な商品開発の手法だと私は思います。そのところで何か成果が出ないのであれば、それはターゲットの読み間違いがあったり、狙ったターゲットに刺さっていなかったり、もしくはもっとひどい場合にはターゲットが定まっていなかったというようなことが原因であると思えますので、マーケットインの発想ばかりに引っ張られすぎない計画であって欲しいと思えます。

ターゲットのお話をさせていただいたので、ひとつ申し上げますと、長野県は全国に比べて20歳から34歳の女性の層、一般的にF1層と言われるところが極めて低くなっています。これをどう読み取るかなんですが、この年齢層の方達は、男性も含めて、お父さんお母さんになったときに、自分が観光や旅行という経験を豊富にしていないと、子どもにも経験させないという傾向がみられています。ですから、この層に長野県で思い出ができる経験をしていただいて、お子さんやお孫さんにリピーターになってもらうという捉えかたもありますので、ここもひとつ着目をされてはどうかと思えます。

逆に長野県は、35歳から49歳の女性の層が、1%ですが全国よりもポイントが高くなっています。ここはいろいろな企業に取り込みたい消費層となっていますので、その強みをどう活かすか、そういったところにも注目していただきたいと感じております。

最後に、観光経済や観光産業についての議論が続いていますが、私もここに大きく危機感を感じております。実は現地に到着してから使うお小遣いは、長野県は47都道府県中38位となっていて、単価で比べると全国平均よりも3,400円も低くなっています。言い換えれば1箱千円の菓子折りにして3箱分低いということです。観光経済で県全体の大きな方針も必要なのですが、まず現地の方でもこのところを、商いの視点だったり儲けるということだったり、単価を引き上げていくことができないのか、そういった視点もひとつ加えていただきたいと思えます。

そして、私は日程が合わず地域懇談会には出られなかったのですが、今日は始まってから危機とか緊急という言葉を何度聞いただろうかと思っています。この審議会の中では将来的な議論をしていくわけですが、今日明日のことは、この場に限らず直ぐに何か対策をとるべきだと思えますので、この審議会での将来のための議論とは少し分けて考えた方がいいのではないかと感じました。

以上でございます。

(佐藤会長)

ありがとうございました。

はい、お願いします。

(松本委員)

ただ今の自然を守るというご提案について一言お願いいたします。

自然保護運動をしている方とかいろいろな人達がありますが、守るというのは自然より人間の方が立場が上であるという前提で出てくる発想なのではないかという議論があります。ですから、言葉の表現なのですが、多くの人々を長野県に迎え入れたいと思った場合に、自然を守るという表現をすることによって除外してしまう人達が出てしまうので、ここは注意をして表現を考えていただきたいと思います。

(佐藤会長)

いかがですか、いいですか。

(井上委員)

ただ今の自然の関係の話なのですが、長野県は東日本と西日本のちょうど真ん中に位置します。それで、自然に関して面白いデータがあるのですが、昔からの地域の固有の地名の付け方として、谷筋川筋の地名を、西日本は〇〇谷という付け方が、東日本は〇〇沢という付け方が多いということです。沢というのはそこにある地域の川筋それから奥地、山を資源として捉えていたというので、長野県は〇〇沢という名前が非常に多い。これは昔の人たちが、長野県のそういう山筋川筋を既に資源として捉えていたという話があります。逆に西日本の方では、危ないもの、単に嫌なものとして、谷という捉え方をしている。ただ、伊那谷という呼称もありますのでどうなのかという気もしますが、いずれにしても、昔から常に自然と共生しながらそこから糧をいただきながら暮らしてきた長野県民というものを踏まえて、常に共生をしてきたという表現が入るといいのかなと思っています。

(佐藤会長)

ありがとうございます。それでは、持続可能な利活用ということにさせていただいて、自然と上手に付き合っていこう、その典型を長野県で見せてあげようじゃないか、あるいはそれに参加させてあげようじゃないかといった視点で、したがってそこからはキャリングキャパシティというお話が先ほど出ていましたが、どこまで受け入れるかということについては長野県民の理性を信頼していただくということで、長野県は無茶なことはしないということを言外に匂わせていく表現でいきたいと思いますがいかがでしょうか。よろしゅうございますが。はい、ありがとうございます。

次に長野県の強みのところに、先程玉沖委員からもありましたが、市場の特徴、長野県というのはどういう人達に今評価され、あるいは評価されてないのかといったようなこと、これが強みと弱みになっていくわけですけど、その辺りのニュアン

スをポテンシャルのような中に、世代層というようなことに触れるというようなことで進めたいと思うのですが、文章にする際は知恵を貸していただこうと思いますので、よろしくお願いします。

それでは次の長野県観光がめざす姿に移ります。ここが清水先生もおっしゃっていた「志」の部分です。この文章を理解するのは、誰がという主語がなくて、なかなか難しいところがあるのですが、例えば「新たな価値を創出し」とあるけど、新たな価値というのは何なのか、それから「おもてなしの心を発信」とあるけど、おもてなしの心とは何なのかということをもう少し噛み砕いて分かりやすくして、読む方に理解できそうだというところまで書いていただきたいと個人的に思います。それから先ほどから議論に出ている観光産業の持続可能な健全な姿を長野県観光の中に柱として入れられないだろうか。それが皆さんのご意見をいただきたいところになるのですが、いかがですか。

なかなかコメントしにくい部分だと思いますが、このめざす姿の部分は多くの方々に耐えられるような志になっているかということも含めて、ご意見ありませんか。

#### (松本委員)

こういう言葉というのは段々と当たり障りのないところに着地していくことになるのですが、書いてある内容に間違いはないと思います。

ただ問題は「豊かな自然環境や優れた景観、伝統や文化など長野県の強みに裏打ちされた豊かな「信州暮らし」と書かれています。この信州暮らしというのは1つのキーワードになるだろうと私は思うのですが、これは一体何をめざしているのか、我々がめざすイメージを出していった方が、メッセージ性が強くなると思います。

先ほども言ったのですが、信州暮らしというのは、例えば農産物にしてもいろいろな食物にしても自給自足をめざすのだとか、しかもそれは、一步一步でもいいからできる限り自然と人間の体に優しい低農薬をめざすのだとか、あるいは自然エネルギーの自給をめざすのだとか、そういう信州暮らしの実態のようなもの、あるいは展望のようなもの、それらすべてを一度に実現できるわけではないですからそういうものをめざして進んでいる長野県なんだというメッセージを強く出すことによって、信州暮らしというのは実は自然と共生する暮らしなのだということをしっかり打ち出したらどうかと、私は思います。

#### (佐藤会長)

ありがとうございます。それが新たな価値というご意見ですね。

豊かな信州暮らし。それを発信するということが長野県観光のめざす姿。いかがでしょうか。

#### (松本委員)

実はさっきの議論のひとつのポイントというのは、観光業とそこに住む人たちの

意識の差がもの凄く大きいということがあります。地域住民は観光というものは自分たちに何らプラスにならないと考えているわけですね。だから多くの人たちは観光をサポートしない、普通に暮らしている人たちがなぜ我々がおもてなしする必要があるのか、という議論になるわけです。

だけれども、自分たちが暮らしている生活のスタイルに誇りをもって、例えば2日間でも3日間でも来訪者に自分たちの生活を一緒にさせてあげようじゃないかということになってくれば、それはホテルに来たっていいし、どこか後の方に出てくるのかも知れませんが、例えば農業と観光の結びつきとか、健康と観光の結びつきとかいろいろな結びつきがありますが、そういうものこそが自分たちの生活スタイルを提供するという形に結びつけていく可能性があると思っています。だから宿泊施設は必ず周辺の農業体験ができる場所と連携しているとか、あるいは信濃町では森林セラピーと病院との連携に取り組んでいます、そういうものを持ってくるとか、そういう組合せをどんどんしていくということが信州暮らしに繋がるのではないかと私は思います。

#### (佐藤会長)

ただ今の松本委員のご意見でちょっと腑に落ちました。ということはこの文章はこのようにいじけると、例えば、「…裏打ちされた豊かな信州暮らしを県民と共に楽しめるように、エネルギーや自然など新たな価値を創出し、おもてなしの心を発信する」。こうなってくると、来訪者と着地側の住民と、その間に入る観光産業が上手く繋がってくる、そんなメッセージになるような感じがします。キーワードは信州暮らし、信州のライフスタイル。いかがですか。

じゃあ2段目の「地域全体で魅力を高める「観光地域づくり」」。これは清水先生が中心になって人づくりの観点で開始していただいている分野も含めて観光地域づくりということになります。先程客単価が低いというお話がありましたが、そのためにはどのような要素が必要なのか、この辺りは玉沖委員がじっくり研究されているので出てくるかと思いますが、やはり滞在時間の長さに比例するのだろうと思います。それで、滞在時間を長くさせるためには地域の皆さんの参加がどうしても不可欠で、1段目にあるように住民の皆さんに信州のライフスタイルを誇りをもって提示してもらわないと滞在時間も長くなってこない。こればかりではなく、例えば博物館とか美術館などの観光資源をどう活かすかっていうことにも当然絡んできますが、いずれにしても観光地域づくりを上手にネットワーク化するイメージかと僕は思いました。ここに「観光産業、農林水産業、商工業など、幅広い事業者が連携し」ということが表現されていますけれど、どうですか。

3段目も一緒にやっちゃいましょう。ここは「信州ブランド」を高め、国内外から選ばれる長野県へ。信州ブランドについては信州ブランド推進室で一生懸命研究していただいています、出来上がったブランドを発信し、そこに信州を結びつけて、さまざまな旅行者を誘致していこうというザックリした形になるのですか、観光部長どうですか。

**(野池観光部長)**

今回は中間とりまとめということで、これから最終的な答申に向けてさらに深堀、肉付けをしていくことになると思っています。

中間とりまとめとはいっても、今委員の皆さんからいろいろお話をお聞きした印象としては、これでは駄目なのだろうと感じました。この審議会の議論、思い、そういったものを整理して伝わるよう、きちんとまとめをしていかなければいけないのではないかと思います。

**(佐藤会長)**

ありがとうございます。

それで、次回までにできるだけ前広に、熟慮された3遍、4編辺りも含めて、委員の皆さんからもう一度ご意見をいただいて、今年暮れ前までには答申するスケジュールになっているので、答申案に落とし込んでいくという作業を、この件で皆さんにお集まりいただく機会はもうないかも知れませんが、個々の意見交換で事務局を通じてまとめ上げていく、ちょっと大変な作業になりますが、そうしていただくということになりますね。

**(野池観光部長)**

中間とりまとめについての議論は、今日の審議会のように皆さんにお集まりいただく機会としては今日だけとなりますが、本日の議論を反映して修正したものを中間とりまとめとしてオープンにしていく、こんな段取りで進めたいと思います。

**(佐藤会長)**

そこで公表する中間とりまとめがその後の全体の流れを引っ張ってしまうということはないですね、その後も修正が加えられますよね。

**(野池観光部長)**

その後さらに修正や肉付けをする作業が待っておりますが、ただ今の議論でもあったように大切な中間的なとりまとめの場面になりますので、審議会の思いが誤解のないようきちんと外に発信できるように、今日いただいた意見をもとに修正して会長に相談したいと思います。

**(佐藤会長)**

松本委員、お願いします。

**(松本委員)**

例えば長野県に観光客が落としていく金額が非常に低いというお話がありました。これは買い物をするという意味でいくと、我々がヨーロッパに行って今ユーロが安いから買いたいと思う場合それは向こうでお金を落とす覚悟でいるわけですね。では長野県ということになると、ヨーロッパでの買い物のようなものはないわけです。

長野県の食の魅力を高めるといっても、京都に行けばどこそこの料理を食べようということになりますが、長野県にそのようなものもないわけです。それを今からつくろうとしても本気で取り組んでもおそらく100年かかるので、今からやったら間に合っこありません。だったら長野県で何にお金を落としてもらうのかということをお金を落とすことを我々は論議しなくてはならない。

それは、一つは景観です。景観なのですが、マイカーで来た人たちはいいとして、マイカーで来なかった人たちにとってみれば2次交通がないわけです。でもタクシーを使えば1万円くらいすぐに使ってしまう。例えばそういう所に補助を出して、観光客が自由に動けるようにしてお金を落としてもらうとか、そういうシステムを考えていかなければいけないのだろうと私は思います。

それから長野県は人口当たりの美術館・博物館数は全国最高なのですが、美術館1館の入場料を800円だとすると3館行ったら2,400円になります、これでは4人家族だったら行きません。ではどうするのかというと、例えば地下鉄とのネットワーク化が始まりましたが、東京にはぐるっとパスというものがあります。これは東京都が全部管理してそれぞれの美術館からの徴収金ももちろんありますが、確か90パーセントか美術館は損をしていません。都はその位のシステムをつくったんです。都が中心になってやらなければあのフリーパスはつくれないんです。美術館、博物館に特徴があるのであれば、例えばそういうパスを県が中心になってつくっていく。

そういうことをしていかない限り、お土産とか食べ物でお金を落とさせるということは難しいのではないかと僕は思います。その代わりに自転車はすごくよい道があって自転車を借りるのも安くて他県に比べてそれが抜群にいいとか、例えば気球に乗るのも他のところと比べてすごく安いとか、別のところでお金を落とさせるシステムを考えていく、そういった発想で考えられたらいいのではないかと思います。

#### (佐藤会長)

ありがとうございます。

今のようなインセンティブもやはり必要だと思います。私は大学に来る前に外国人向けのレールパスやカルチャーパスのような仕組みづくりに携わっていたのですが、そのときは、日本は高いという意識を変えるためにインセンティブを付けてできるだけお得なものを提供しようということに取り組んでいました。僕は長野に来てなぜそういう制度がないのかと思いました。安曇野にはアートラインがあって何十という美術館があるのですが、一軒一軒で500円、600円と取られていたら大変な金額になるので、僕は全部行こうという気になりません。だったら何日間有効、あるいは何軒まで使えますという仕組みでパスをつくって販売できないだろうか、そういうことを思って皆さん方に訴えているのですが、事業者の方達が嫌がるんです。うちに来るお客さんを他に取られるだとか、あるいは入ってきたお金をどうやって分けるんだとかね。なんだか妙なことで、そんなテクニカルで簡単なことに何で文句言うのだろう、こう思う次第です。

今、国内でも例えば湯めぐり手形のようなものがどんどん出ています。共同して

皆が意思疎通をうまくやれば、清水先生が塾で育てているような20数名の志をもった若者たちでも、結びついて「お前がやっているのだから、俺もやるよ」ということができれば、おそらくそういう地平線がみえてくるのではないかという感じがします。僕は今まで何度もトライして殆ど返り討ちにあって戻ってきているのですが、そういったインセンティブを県が主体になるとか、あるいは日本全体でやるべき問題だと僕は思っているの、全体で動きがとれればいいと思います。

日本の観光とかあるいは長野県の観光というのは素材をいっぱい持っているのだから、活かせるような気がします。そしてできるだけ、滞在してもらう。お土産だけじゃ駄目なんです。泊まってもらわないことには観光産業の中に大きなうねりができてこないのです。宿泊における経済効果の方がその他の消費よりも遥かに率が高いということが計算上出ていますので、できるだけ滞在型観光に切り替えていけるように、めざす姿のこのところを是非強化してもらいたいと思います。

#### (岡庭委員)

信州暮らしと打ち出しているの、わからなくなってしまうのではないかと思います。

今、昼紙温泉ではスターブレッジといって、星を見る着地型のプログラムをやっています。当初お客さんは来ないのではないかと心配していましたが、やってみたらすごく盛況でした。それから今お客さんに行きたいところをたずねると、下栗の里へ行きたいという声をききます。そういうことから考えると、我々が守ってきたもの、あるいは我々自身が価値に気づいていないような価値を発掘して体験してもらうということ、この体験を通して日本人としての新しい生き方を切り開いてもらうことが重要なのではないのでしょうか。

例えば、農家民泊をやると都会の子どもたちが翌朝お父さんやお母さんと涙で分かれるわけです。そういうことが子どもたちのしっかりした生き方をつくる基礎になっているということから考えると、また、長野県観光が志を高めるとするならば、ただ単に信州暮らしとするのではなく、自然や文化、あるいは暮らしといった長野県にあるさまざまなものの体験を通じて、現代に生きる力を共有できるようなことをやるのが長野県の観光なのだという形で、それ位のめざす姿を掲げるべきではないでしょうか。

そうすると、先ほど会長から滞在時間を増やすことが重要というお話がありましたが、お土産のお菓子を買ってもらうのではなく、体験すればその分だけそこでそばを食べる、いろいろするというので、落とすお金が大きくなる、モノではなく体験をすることができる、やはりそういう形を長野県観光がめざしていくというようにこの部分は書けないかと思います。

#### (中川委員)

佐藤会長にうかがうのがいいのか、野池部長にうかがった方がいいのか、ちょっと教えていただきたいのですが、新しい計画は観光審議会の意見を踏まえて観光部でおつくりになるわけですね。非常に基本的なことをおうかがいするのですが、

今あるようなこういうトレンド傾向風な書き方でいいのでしょうか。これをみた市町村や下部組織が一番知りたいのは、それでは具体的にどのような方法でやっていくのかということだと思います。

質問というのはここからなのですが、例えば、ケーススタディーとして県が一つの戦略を立てて、市町村あるいは広域が具体的な戦術を立ててみたらどうだ、みたいな、具体的な提案をしてやったらどうなのかと思います。それをこういう書類にしていいのかわかりませんが、私が逆の立場で下部組織にいてこういう書類を受け取る場合には、多分そこが一番見たいという気がします。

私もそれがいいのかどうなのか判断つかないのですが、そういうことをやるのはいいだろうけど、ここに込めることがいいのかどうなのか、ちょっと分からないので、ご意見をいただければと思います。

#### (佐藤会長)

ありがとうございます。

要するに、めざす姿を決めて、第4編には施策展開とありますが、これに基づいて県内10か所の地方事務所がそれぞれにこのテーマについてどう考えどう実施するのか、各地域で市町村なども含めて、地域毎のビジョンを検討していただくという感覚でずっとやってきているわけです。したがってこれをベースに各地域では、各地域の特性などを活かした形で、こんなことをやります、あんなことをやっていますというものが上ってくるはずです。

そしてそれが何年か経ったら、どんな成果が出たのかという評価の形になってくるのだろうと思います。

#### (中川委員)

多分佐藤会長のおっしゃるとおりの形なのでしょうけれども、これは私の素朴な経験ですが、以前私が安曇野市の行政を預かって県の観光部と向き合った時に、県から具体的なデータとかこういう方向性だよという資料は頂戴するのですが、こういうことを考えようとか、俺たちはこういう方向で進むぞとか、そういう具体的なサジェッションとか共同提案でもいいのですが、そういうのがあまりなくとても残念に感じたので、せっかくならもう一歩進めていただけたら、喜ぶ人が多いんじゃないかという気がします。

#### (佐藤会長)

そうですね、そういう意味で今めざす姿の中に入っている言葉が施策展開で具体的にどのように繋がっていくのかというのは、これから審議いただく重要な部分だと思っています。

例えば、めざす姿に「滞在時間を増加させる」とあるけれども、それを踏まえて第4編の施策展開にある観光地域づくりや観光の高付加価値化のところで具体的にどういう取組をして滞在を増やすのかということがあります。さらには、第5編の地域別の観光ビジョンの中で、各地域が独自の滞在延長プランのようなものを立て

て実行に移す、という感じの繋がりになってくればようやくめざす姿というものが生きてくるのだらうと思います。

ですからさっき、いいですかこれで、と聞いたのですが、このままでいってしまうと、おそらくめざす姿はすっかり忘れられて、下の施策展開で人材育成だとか、他のブランドだとか、ニューツーリズムだとか、そっちの方だけに行ってしまうような気がするのです。だからそういう意味でもっと分かりやすい姿というものをきちんと整理してあげるということと、そこから皆さんがどんなことを期待されているのか、あるいはこんなことをしてもらいたいと思っているのか、業者の方も市民の方も、あるいは旅行者にも教育的な価値で分かってもらおうという方向でやれるのではないか、こんな感じで僕はみているんです。

**(中川委員)**

1つの例でもいいんですけどね。

**(佐藤会長)**

だから滞在というキーワードだけでももの凄いインパクトがあると思います。長野県はこれだけ滞在時間が少なく、一人あたりの消費額はこの程度なんだよ、日本全体で何十何番目なんだよ、それ以外は1番目か2番目なのに。滞在時間をどうやったら長くできるのかということ、そういう基点をどこかでかちっとテーマとして持たせておけば、それがいろいろなところに繋がって、面白い結果が生まれるのではないかと思います。

**(中川委員)**

佐藤会長にそこまで言っていたので、1つの例としてお聞きいただければと思います。

私が安曇野市で行政に携わった最後の年に観光のポスターで、観光と思えない不倫のカップルが歩いているようなポスターに、「安曇野で漂う三十六時間」というコピーをでかでかと打ったのですが、どういう意味なんだという問合せが全国から700件くらいありました。例えばこういう一歩踏み込みこんだものがあるのもいいのではないかという気がします。

**(佐藤会長)**

本来ですともう終わっている時間なのですが、議論が大分盛り上がっています。

皆さんからいろいろご発言をいただいたところで、事務局の方にはこれを一字一句漏らさず頭の中に叩き込んでいただいて、次回審議会の前に少し手を加えたものを皆さんの方に前広にもう一度レビューをしていただいて、ご理解なり納得なりディスカッションなりしていただきながら、ちょっと長距離になりますが、そんなことをさせていただいて、最終の答申案づくりに向けて進めていきたいと個人的には考えます。それはまかりならぬというご意見があればこの場でいただけたらと思います。

塩島さん、いかがでしょうか。

**(塩島委員)**

そうですね、めざす姿の「長野県観光のブランド力を高め、」というのが、あまりみえてこないと思っています。やはり山岳とか高原とかそういうものは全国各地にあるので、長野県に来たら、アクセスは悪いのだけど、手ぶらで楽ちんになるんだと打ち出してはどうでしょうか。手ぶらというのは、私共は宿を営んでいますが、一泊のお客様が観光のために移動する範囲というのはだいたい 150 キロくらいになります。ヨーロッパなどでは、例えばジュネーブからツェルマットに旅行して泊まる場合、ジュネーブで荷物を預ければその日のうちにツェルマットにその荷物が届いているので、その間手ぶらでトレッキングすることができる。さっき松本委員がおっしゃったみたいに、アクセスが非常に悪いので、長野県に来れば本当に安心・安全で手ぶらで楽ちんだよという、具体的にそういうものを提示していただく方がわかりやすいのかなという気がしました。

**(佐藤会長)**

たいへん具体的なよいお話をありがとうございました。  
他にどうでしょうか。

**(久保田委員)**

最後近くになって細かいことでたいへん恐縮なのですが、このめざす姿を読んだ時に、間違っただけとは言っていないのですが、なんかこう漠としているというのが皆さまの受けたイメージではないかと思います。その中で「豊かな「信州暮らし」を楽しみ、発信」というところの最後にある「おもてなしの心で発信する」という部分がどういうことなのかわからなかったのですが、先ほど佐藤会長がおもてなしの心を発信するっておっしゃられて、おもてなしの心を発信するのだったらわかる気がしました。その辺りをもうちょっと、読んで分かりやすく伝わるような表現にしていただければと思います。

**(佐藤会長)**

わかりやすくというのは、たいへん大事なポイントです。

それで、今日ご議論いただいたことを中間とりまとめの案という形で、もう一度皆様のご意見をうかがうために回覧させていただこうと思います。そのために私と事務局の方で皆様のご意向を間違いなく反映させる形でとりまとめて行きたいと思っています。皆さんを前にこのようにお話しする機会は次回の審議会までの間はないのでご了承いただきたいと思っています。

それで、その後の最後の答申に向けて、例えば具体的な役割分担、重点的に取り組む施策などについては、次回の審議会でも素案として皆様にご案内させていただいて、ご意見をうけたまわりながら進めたいと思いますが、ご了承いただけますでしょうか。

特にご異議がないようでしたら、本日はここまでということで、終わりにしたいと思えます。

その他の事項について事務局から説明があります。よろしくお願ひします。

**(浅井観光企画課長)**

さまざまご意見をいただき、ありがとうございました。

連絡でございます。次回の審議会の日程ですが、10月15日月曜日を今のところ予定させていただいております。詳しくは後日事務局からお知らせを致しますので、よろしくお願ひいたします。

なお、お席にお名前が入ったファイルを用意してございますので、お持ち帰りにならない資料等ございましたら、置いて行っていただければ事務局でファイリングさせていただきますと思えます。

連絡は以上でございます。

**(佐藤会長)**

ありがとうございます。

置いて行っていいって言うけど、今日の大事なところは持って帰ってもらった方がいいですね、お持ちいただいて復習していただくということで。今日の資料の分量はそれほどありませんので、ひとつお持ち帰りいただいて、お勉強していただければと思えます。

最後でございますが、この際、皆さんと何かお話を共有しておきたいということがございましたら、挙手をしてご発言をお願いしたいと思えます。いかがですか。事務局の方はいいですか。

**(野池観光部長)**

佐藤会長をはじめ、委員の皆さんありがとうございました。

あらためてではあります、諮問させていただいた際の方向も、事務局が案をつくってそれにご同意いただくような手法は全く考えておりません、むしろ起草委員会を設けて起草に携わっていただき強い思いをぶつけて欲しいという知事の想いがあるくらいですので、皆さまからいただいたご提案は、私がふり返る限り、二律背反といいますか、両立しない意見というのはなかったと思えますので、もう一度丁寧に振り返らせていただいて、佐藤会長とも相談をさせていただき、分かりやすさということについても旨として盛り込んでいきたいと思えます。恐縮ですがもう一度連絡をさせていただき、目を通していただければと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。

**(佐藤会長)**

ありがとうございました。

それでは長くなりましたけれども、皆様のご協力を得ながら粛々と進めて行きたいと思えます。

本日は長野県観光振興審議会ご出席いただきまして、本当にありがとうございました。  
次回審議会も是非ご出席いただきますようお願い致します。  
ありがとうございました。

以上